

二〇一八年度

聖園女学院中学校 入学試験問題

国語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで中を開いてはいけません。
- 二、受験番号・氏名を解答用紙の定められた欄にかならず記入しなさい。
- 三、試験問題の印刷がはつきりしない場合には手をあげなさい。
- 四、解答は解答用紙に記入し、解答用紙のみ提出しなさい。

四次

一、次の——線部をひらがなに直しなさい。

- (1) 今年初めての積雪があつた。 (2) 熱湯で消毒する。 (3) 一斉に作業を始める。
(4) 荷物を宅配する。 (5) 手の温もりが伝わる。

二、次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) 母は手先がきょうだ。 (2) 説明をほそくする。 (3) 公園でべんとうを食べる。
(4) 新聞社のとくはいんが書いた記事。 (5) 友人の恩にむくいる。

三、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

石の道具から鉄の道具へ移り変わることは、人びとの生活や社会にどのような影響をもたらすのでしょうか。

ニューギニアの東部高地に、「シアネ」ということばで挨拶をするということとでまとめて扱^①える人びとがいます。シアネの人びとはサツマイモやそのほかの農作物をつくり、ブタを飼っています。

かれらはかつて石器を使つてくらししていました。男も女も起きている時間の八〇パーセントは生きるための労働をしなければなりません。斧は完全に男のもので、労働には石斧を使いました。新しく畑をつくるために森を伐採するとか、木を倒して垣根をつくるとか、建物を建^②てるということが男の仕事です。女の仕事は育児、食事づくり、ブタの世話といろいろありました。

そこへ鉄の斧が入ってきました。鉄の斧を使うのはとうぜん男です。女のほうは斧は使っていませんから、ぜんぜん関係ありません。鉄の登場は、男だけを解放する結果に終わりました。

そこで、考えてみましょう。重い石の斧と、それにくらべれば軽い鉄の斧では、どのぐらい効率がちがうと思えますか。答えは一對四です。つまり、石の斧で四〇分かつていた仕事は、鉄の斧で一〇分で済みますことができるのです。石の斧で一本倒す時間に、鉄の斧なら四本倒せるということです。刃をときなおす時間は計算にいれません。

鉄の斧が入ってきたことによつて、シアネの男たちは、いままで八〇パーセントの時間を働かなければならなかったのに、五〇パーセント働けばよくなったのです。三〇パーセントの時間が浮きました。では、浮いた三〇パーセントの時間をかれらはどう使つたのでしょうか。

それまでは自分のごく親しい人びとの祭りにしか出席できなかったのが、時間が浮いたので、それほど親しくない人の祭りや儀式にも出席するようになりました。(A) 祭りや儀式には宴会^{えんかい}がつきものですから、宴会への出席が多くなります。(B) すると、村はずれに飼っているブタやよその村のブタを盗むということがはじまりました。(C) ブタ泥棒^{どろぼう}が増えてきたのです。(D) その結果、村と村とのいさかきがおきる、つまり戦争がおきるようになりました。石から鉄への変化は、宴会を増やし、ブタ泥棒を増やし、戦争を増やしたのです。しかも、男たちだけが鉄器時代を迎えたのであつて、女^③たちは石器時代のままでした。これがシアネの人びとのあいだの石から鉄への変化の結果でした。

つぎに、オーストラリアのヨーク半島のつけね、西側にいたイル・イヨロント族の変化を見てみます。

かれらは食料採集民で、狩りをしたり木の実を集めたりという生活をしていました。かれらにとつても石斧は男のものでした。奥さんや子供が借りることはできませんでしたけれど、借りるとき、返すときのあいさつは、夫は妻に、父は子に優位に立っていることを確かめる機会でした。そこへ白人がやってきて、鉄の斧が入ってきました。イル・イヨロント族の人びとが白人の手助けをすると、その代償として鉄の斧をくれたりします。ときには、奥さんが鉄の斧をもらうことがあります。夫^④のほうは石の斧しかもっていないのに、奥さんが鉄の斧をもっていることになりま^④す。そうすると、「すまんけど、おまえの鉄の斧を貸してくれ」ということもおきてきます。このようなことから、意外や意外、石が鉄に代わったことが、夫が上に立ち、妻が下にいるという上下関係をくずしていったのです。これが石が鉄に代わったことでおきたさまざまな結果の一つです。

もっと重要なことは、イル・イヨロント族が浮いた時間をどう使ったかということです。この点にいま私は大きな関心をもっています。

浮いた時間を使って、なんとかれらは昼寝をしたのです。私はじつは、その部分を読んだときに吹き出してしまいました。この笑いには軽蔑けいべつの意味もふくまれていたと思うのです。ところが、私のこの感想はじつはまちがっていた、といまは思っています。

二〇〇年前、日本ではどうだったでしょうか。石から鉄へと変わってきたときに、弥生人はおそらく浮いた時間で宴会に出席することも、昼寝をすることもしませんでした。石から鉄への変化を、生産力の飛躍的な増大につなげたのです。いままで石の斧が一本倒している時間で、四本倒すというぐあいに、すごく生産力を高めたのです。

四世紀、六世紀（古墳時代）の農民が働き者だったことは、群馬県で火山の噴火や洪水の直後に復旧工事にとりくんだ証拠からわかっています。

パプア・ニューギニアやオーストラリアでは浮いた時間を遊びに使ったのに、日本では労働に使ったということ、日本人は勤勉だと先祖をほめたたえるつもりか、と思われるかもしれませんが。そうではありません。

^⑤道具や技術は、毎年のようにどんどんすぐれたものになっていきます。なんのためだと思えますか。質問すると、すこしでも楽になるようにとか、効率がよくなるようにとか、企業がもうけるためだとかいう答えがよくもどってきます。しかし、結果から見ると、私はそうではない面もあると思うのです。

じつは、私たちを忙しくするために道具や技術は発達してきているのではないのでしょうか。それまで一〇時間かかったところを、三時間で行くことができるようになったとします。浮いた七時間をどう使うかと考えてみると、ほかの仕事をしているのです。

すくなくともつい最近までは、歩いている時間とか車に乗っている時間はポケットとしていたことができませんでした。あるいは空想にふけることができました。しかし、いまや携帯電話ができたのです。歩いていても、車に乗っていても、いつ電話がかかってくるかわかりません。相手からだけでなく、自分からもかけます。なんにもそんなときまでと思うのですが、そんな大人たちが増えています。

私たちは、技術や道具の発達は自分たちを解放するためだと思っていますが、じつは大きな誤解で、自分たちを忙しくするために技術や道具が発達している面もあるのではないかと思うのです。そこで私は思うのです。オーストラリアのイル・イヨロント族が浮いた時間を寝たというのは、正解だ、と。

多田道太郎さんは、つぎのようなことを私に語ってくれました。

日本には「休む」とか「怠なまける」ということばがあるけれども、みんな悪い意味で使われている。しかし、私たちは、むしろ強制されたことはなにもしないという状況に自分をおくことがたいせつだ。そういう状況のなかで、自由にしたいことをする、それが遊びだ。

多田さんのいうことのなかに、私にとってひじょうに重要なことがふくまれていました。それは、強制されている状況からは空想力がはばたくはずがない、休んではじめて人間の構想力とか空想力がはばたくのだということです。働きづめに働いていると、そのあげくに出てくることは、しよせんたいしたことはないのだということです。空想力は想像力とおきかえてもいい。アインシュタインが知識よりも想像力のほうがずっとたいせつだ、といっていることを思いだします。

たしかに日本人は働きすぎると思います。私たちはもうすこし余裕をもって、^⑥いい意味での怠惰たいだの精神、遊びの精神で生きていくべきではないでしょうか。これをなによりもまず自分自身にいいたいと思います。もっと余裕をもって、遊びをもって生きていったらいいのではないか、それをイル・イヨロント族に学びたいという思いなのです。

（佐原真『遺跡が語る日本人のくらし』より。一部改変）

四、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

広い体育館があつて「ここで何をしてもいいよ」と言われたら、どうしますか? 「どこでもいいから、寝てください」と言われたとしても、たぶん、ほとんどの人が体育館のど真ん中で寝たいとは思わないはず。

やっぱり、近くに壁があるところに行こうとするんじゃないだろうか。自分の周りに防壁御してくれるもの、守ってくれるものが欲しい。自分がひとりぼっちだと感じないですむような囲いを求めてしまふ。

「自由に生きる」というのは、その囲いを出て、まっさらで何の囲いもない場所に、ぼつんとひとり、立つことなのだと思ひます。

ものすごい孤独感や心許なさ、自分自身の頼りなさにさらされて、身が A ような思いをするかもしれない。それを感じないですむように、人は群れで生きるのでしょうか。

囲いの中にいて、自分の所属するコミュニティの価値観に合わせていけば、安心だし、自分で何かを判断する必要があるのですから、ラクです。「群衆」というのは、つまり人が身を守るための囲いでもあるんです。

そこが自分に合わない場所だと、囲いに合わせることはかなり息苦しい。反対にじっくりとくる場所なら、案外苦にならなかつたりもする。いずれにせよ、人はその場に適応するために、周りの価値観と自分の価値観のせめぎ合いを、どうにかやりくりしながら生きています。

どこにいても、マイペースに振る舞える人もいれば、みんなといると自分を出せないという人もいる。自分ではうまく振る舞っているつもりでも、実際は体を無理な形にして縮こまらせている人もいます。

旅に出て、自分のことを誰も知らない場所に身を置くと、そのことがよく実感できます。それまでの経験や価値観が通用するかどうかもわからない場所で、人は自分を試される。ましてそれがひとり旅なら、何かをするたびに自分で判断しなければならぬわけで、まっさらな場所で「お前は何者なのか」と問われているような気持ちになるはずです。そうやって自分で考え、自分で感じ、自分の手と足を使って学んでいくことを「経験」と言うのだと思ひます。囲いの外に出なければ、血肉となるような経験は得られないでしょう。

初めてひとり旅をしたのは一四歳の時でした。

オーケストラのヴィオラ奏者をしている母は、ヨーロッパに音楽家の友人がたくさんいます。一か月かけてフランス・ドイツ・ベルギーを巡るその旅は、もともとは母がその人たちに会いに行くはずのものでした。ところが、急に母が行けなくなつたので、冬休みだった私が代わりに行くことになつたのです。

フランスに到着してからの数日間は、リヨン近郊の小さな町に暮らす、母の知り合いの家に泊めてもらったものの、その後、パリに移動してからはホテル。移動もすべてひとりでした。一週間滞在する予定だったホテルをオーバーブッキングを理由に追い出され、路頭に迷つた私は「どうするの、これ?」と途方に暮れました。

厳寒のパリ。容赦なく日は暮れていきます。言葉だつてろくに話せないし、お金だつてたいして持ってない。凍てつく街をさまよつた挙句、路上に倒れでもしたら、一体誰が助けてくれるのでしょうか。その日はたまたま空いているホテルがあつたから良かったようなものの、 B な旅はまだ始まつたばかりでした。

一体、自分はこんなところで何をしているのだろう。何度もそう思ひました。大きな荷物を抱え、とほとほと街を歩いていると、さすがに心細くなり、悪い想像がいくだけでも浮かんできます。

どこかにさらわれて売られ飛ばされるか、それとも自分の足で歩くか、どっちかしかない。追い込まれば、子どもだけでも必死で考えるわけです。

もう本当にだめなんじゃないか、このまま野たれ死にするんじゃないかと思つた時、ふいに「頼れるのは自分しかない」という気持ちがありました。今の自分を助けられるのは、そこらへんを歩いている人でも、日本にいる母親でもない。ほかの誰でもない。私は、私を頼る――。

「頼むよ、自分」「頼むよ、もう、お前しかないんだ」

自分で自分に声がけしたあの時、私には自分を支えるもうひとりの自分という運命共同体ができたのです。過酷な状況に巻き込まれても、そういうもうひとりの自分がいれば、客観的に自分の状況を見つめることができます。

そのことが、その先の人生を生きるうえで、どれほど力になったことか！

死に物狂いで窮地を切り抜けようとすれば、一四歳でも立派に自分の哲学を持てるのです。これは、私自身にとっても驚きでした。一四年しか生きていなくても「自分でなんとかするしかない」と思えば、ひとりの人間としていろんな判断ができる。意外に頼りがいのある自分を発見して、それが自信になっていく。

あの時の私が、しっかりした子どもだったかと言えば、とてもそうは思えない。

苦境に置かれなければ、生まれてこない感情、自分に対する信頼感というのがあるんですね。それをいかにつかみとるか。

それにはやっぱり、自分で動いて痛い思いをしたり、傷ついたり、恥をかいたりすることが必要なんだと思います。そういう実体験を伴わないと、自分の中にある辞書のボキヤブラリーは増えていかない。付け焼刃で書き込もうとしても、無理なんです。

海外に行けば答えが見つかるとも思えない。そんな短絡的で誰にでも当てはまるような方程式は、人生にはない。失敗を恐れて、動き出せない人は、自分の中で全部をやるうとしてるんじゃないでしょうか。一か所にとどまっていると、悩みばかりがどんどん成長していつてしまいます。もうだめだと追い込まれた時こそ、世界に向かってもっと自分を開いていった方がいい。

本当に自分が欲している栄養分はなんなのか。

それは人によっても違うし、家族や友人にすらわからなかったりする。どこに行けばそれがあるのかは、自分で見つけ出すしかないのです。もし今いる環境の中に自分のプラスになるものがないのなら、それを探す手間を惜しまないこと。

そのためには、やっぱり、歩き出すしかない。

なげなしの自分を頼みにして、最初の一步を踏み出すこと。

一四歳のひとり旅は、私に「まず自分の足で立つ」ということを教えてくれたのです。とはいえ、旅をしている間はあまりにも必死で、自分なりに「よくやった！」と思っていたけれど、あとになって振り返ってみれば、やはり自分の力だけではどうしようもなかった。リヨン駅で呆然としていた私を乗り継ぎの駅まで連れてってくれた親切なタクシートの運転手さん、自分からは何も言わずにいた私に「あなた、このあとはどうするの？」と気遣ってくれた母の友人、その時はお礼を言う余裕さえなかったけれど、その都度、つないでくれた人たちがいてくれたおかげで、どうにか無事に帰ってくる事ができたのだと思います。

自力ってなんでしょうね。たとえささやかなことであれ、何かを成し遂げるたびにそう問いかげずにはいられないのは、自分の力だけではない、偶然の力が人を思いがけない場所へと導いてくれると感じるからです。身ひとつ投げ出してみると、向こうから思いがけない出会いがやってくることもあるのです。

(ヤマザキマリ『国境のない生き方―私をつくった本と旅―』より。一部改変)

(注) ※1 オーバーブッキング……定員以上の予約をとること。

※2 ボキヤブラリー……語彙。単語数。

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

(問一) — 線①「の」・②「の」・③「の」・④「の」の中で、意味・用法が異なるものを一つ選び、番号で答えなさい。
(問二) — 線⑤が「体が縮んで動かなくなる」という意味になるように、A に当てはまる言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) かすむ (イ) すくむ (ウ) よわる (エ) さける

(問三) — 線⑥「囲いに合わせること」とはどのようなことですか。「に合わせること。」につながるように、ここより前の文中から二十字以内で探し、書き抜きなさい。

(問四) — 線⑦「血肉となるような経験」とありますが、この内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 今までの経験や価値観が通用するかどうかわからない場所に身を置き、自分自身を試すこと。
(イ) 孤独を感じないですむ場所で、自分とは何者なのかについて自分で考えて答えを探すこと。
(ウ) 自分自身の頼りなさを自覚し、いつも自分の考えを周りに確認しながら行動すること。
(エ) 周りの価値観と自分の価値観の差を意識しながら旅行し、自分の価値観を大切にすること。

(問五) — 線⑧「もの」を用いて、主語・述語のととのった短文を作りなさい。

(問六) — 線⑨「一体誰が助けてくれるのでしょうか」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 誰も助けてくれないだろうということ。 (イ) 誰かわからない人が助けてくれるということ。
(ウ) 誰もが助けてくれるだろうということ。 (エ) 誰かわからないから助けてくれないということ。

(問七) — B に当てはまる四字熟語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 無味乾燥 (イ) 前途多難 (ウ) 順風満帆 (エ) 用意周到

(問八) — 線⑩「もうひとりの自分」とは、どういう自分ですか。説明しなさい。

(問九) — 線⑪「自分の力だけではどうしようもなかった」とありますが、他に何があったのですか。文中から四字で探し、書き抜きなさい。

問題は、ここで終わりです。